

日本人の忘れもの

vol.43



京都、こころここに

東日本大震災からすでに1年がすぎた。なぜあのような大災害に見舞われたのか。被災地に立ってみて、私は自然がわれわれに警告を發したように感じられた。

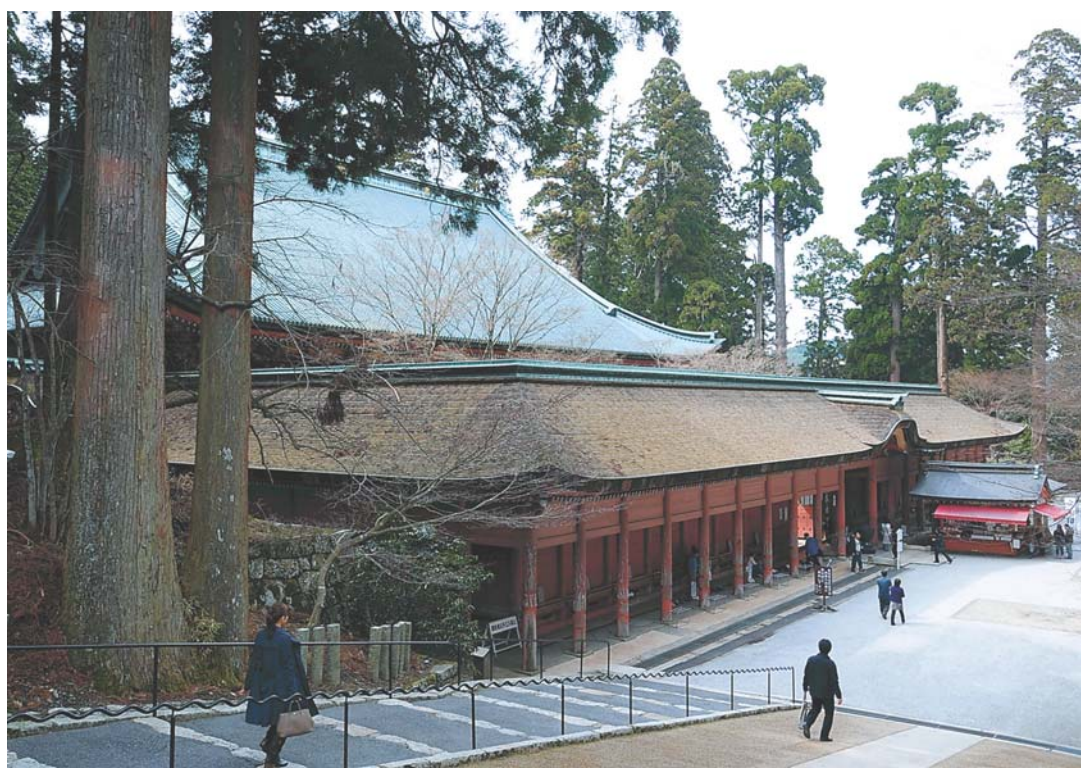
「前に前」では世の中うまくいくはずがない

日本人はかつてない豊かな社会を実現したが、利便や効率ばかりを追求する中で傲慢となり、自然への畏敬を忘れてしまった。利便を支えてきた原子力発電所の、あのひどい壊れ方を見ると、だれしも傲慢さを反省しないわけにはいかない



だろう。

今はエレレストに登れば、人はこれを「征服した」と表現する。自然をねじ伏せたと思ひ込み、自然に生かされている



比叡山の修行は「論湿寒貧」と呼ばれる厳しい環境で続けられる。傲慢を捨て自然を畏敬することなしに、行は成り立たない(延暦寺根本中堂)

利便・効率追求、傲慢になった今こそ「忘己利他」の精神を：

実感や感動がどこかへいつてしまった。日本の山岳信仰では、行者さんたちは今も六根清浄を唱えながら山を登っていく。六根とは眼耳鼻舌身意であり、それ

いまこそ忘己利他、「己」を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」と唱えられた伝教大師のご精神が生かされなければならぬ。東日本大震災では、発生と同時に多くの若い人たちがボランティアに駆けつけた。「電気も水もない。被災者はどうしているか」と思いやり、居ても立ってもいられないから飛んで行った。まさに利他の精神であり、被災地の大きな力になった。こうした行動は日本の希望の芽であり、大切に育てていきたい。法華経に常不輕菩薩の話が出てくる。

一步退く慎み

天台座主 半田 孝淳さん



はんだ・こうじゅん 1917年、長野県上田市生まれ。大正大卒。天台宗務庁教学部長などを経て99年探題に。世界平和を祈る「比叡山宗教サミット(87年)」開催などに尽力した。曼殊院門主の後、2007年、第256世天台座主を相承。ことし4月からは全日本仏教会会長も務める。

らが清くなければ聖なるお山に登ることは許されない。傲慢や我欲を断ち、六根清浄を大声で唱えて、ようやく頂上に立つと、感謝と感動が自然に胸にわいてくる。これが本来の山や自然との向き合い方だと思う。

戦後の自由主義や平等の観念は立派ではあるが、無責任に好き放題を言う悪い面を感じる。親が勝手に自分を生んだとか、体は自分だけのものと考え、奔放に走る人が少なくない。自分の中に世界があるように誤解して、自分が「前に前」に出てしまう。

みんなが傲慢になり前に出るばかりでは、世の中はうまくいくはずがない。謙讓と慎み、一步退く心の動きが起きないのは困ったことだ。世の中は人間どうしの共同生活だから、自分を慎み他人を思いやるのが欠かせない。

被災地の若きボランティアが希望の芽に

いまこそ忘己利他、「己」を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」と唱えられた伝教大師のご精神が生かされなければならぬ。



戦後、日本人は物の豊かさや引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

出会う人すべてに「あなたは仏になる人だ」と言って合掌礼拝する立派な菩薩だった。

「論湿寒貧」に耐え全うする 比叡での修行

籠山行や回峰行に打ち込んでいる比叡山の僧たちは、常不輕菩薩の行を身をもって実践している立場だ。朝早く起きて山中をめぐりお一人お一人の仏様を拜む。そうすると、最後には道端の石まで拜む気持ちにならなくなる。

比叡山の修行は「論湿寒貧」と呼ばれ、清貧に暮らし、暑さ寒さの厳しい環境に耐えながら全うしなければならぬ。傲慢、我欲を捨て、自然への畏敬なしにはできない行なのだ。

忘己利他のご精神はそのような道場である比叡山から生まれた。われわれ日本人が、自らこれを行動に移すことで復興を成し遂げ、世界の信頼を再び勝ち取れるように、と心から願っている。

日本の暦

八十八夜

ゴールデンウィークに入り、あきつてはもう5月。ことしはうるう年なので、平年なら5月2日の「八十八夜」は1日に早まりました。立春から数えて88日目にあたるとの日は昔から「八十八夜の別れ霜」という言葉があるように、遅霜の危険が残る最後の時期とされます。茶摘み作業をする農家にとって油断を戒める日でもあります。

日本の旧暦は農事暦の性格が強くお百姓さんたちの体得した農業の知恵が詰まっています。八十八夜はその代表格。江戸時代から暦に載るようになりまし。

明治になって「夏も近づく八十八夜」と小学唱歌にも歌われるようになり、すっかり定着しました。



田中 田中 鶴子さん

子育て四力条

- (一) あいさつは明るく笑顔で
 - (二) 返事は大ききくはつきりと
 - (三) 人の嫌がることはしない
 - (四) 神仏(ご先祖)を大切に
- これは、私の子育て四力条です。と申しましたが、私が子育てをしてきたのは半世紀以上前のことですから、時代が違ったこと笑われるかもしれませんがね。

近頃は、ウェブや多機能携帯端末によって、時や場所を選ばずコミュニケーションが可能で、便利な時代になりました。半面、胸襟を開いて、言葉やしぐさで礼節を交わす温もりのあるあいさつが忘れられているようで、寂しい気がいたします。

学園では、古くからあらゆる年齢層に好印象をもって受け入れられる身だしなみ、立ち居振る舞い、あいさつなど、礼儀や規範教育に力を注いできました。人心の荒廃が危惧される現代社会だからこそ、専門知識や技能とともに、正しい態度、姿勢など横断的能力の醸成が大切と感じます。

ホスピタリティ精神と人間的な魅力を兼ね備えた人の存在が社会を豊かに明るくします。気持ちのこもった「あいさつ」こそが、おもてなしの原点ではないでしょうか。昔は子育て四力条でしたが、現代社会には「大人に必要な四力条」と言えるかも知れません。

(次回5月6日のリレーメッセージは、京都女性スポーツの会会長の水野加奈子さんです)

(「日本人の忘れもの」は、京都新聞ホームページ <http://kyonon.jp/kp/kyo-np/info/nwc/>でご覧いただけます)

www.zycc.co.jp ZYCC

扇

影月

Que le souffle

de l'éventail disperse les mots et ne laisse passer que ce qui touche

dans mon lit je vois que ma main

trace une ombre sur le mur La lune s'est levée

日本人の忘れもの
幕末以降、多くの外国人が日本にきました。日本人の持つ豊かな感性、価値観、美意識は彼らに強い衝撃を与え、それらはやがてジャポニズムと呼ばれる大きな潮流となり、世界中に日本文化を知らしめる事になりました。それから約百年後、日本文化に心酔した一人の外国人がいました。その人の名はポール・クロード。外交官であり、詩人、劇作家でもありました。日本文化に共鳴し、世界へその素晴らしさを発信してくれました。百扇帖と名付けられた彼の短詞集には日本文化への強い思いが込められています。一方で、文化が持つ経済効果にも着目し、知的生産活動の拠点として渋谷栄一と共に日仏会館を設立しました。その功績は、渋谷・クロード賞として今日も文化功労者へ贈られています。ZYCCも日本文化に立脚し、世界の文化にも目を開き様々な空間創りに役立てて行きたいと思っています。

2005年、創立200周年を迎え旧社名ゼニヤより、新しくジーク株式会社に社名変更いたしました。
新社名「ZYCC(ジーク)」は、従来の社名「ZENIYA(ゼニヤ)」より、「Z」と「Y」を残しました。それは、この2文字に、過去の歴史の意義を感じ大切に受けとめているからです。
「CC」は、「Commitment(約束)」「Confidence(信頼)」「Creative(創造力)」を意味し、信頼と約束を基盤に創造力あふれる企業(Corporation)を目指します。

ZYCC 商業施設、イベント施設、文化教育施設、レジャー・スポーツ施設などのコンサルティング・企画・設計・監理・施工
●京都店 075-681-0511 ●東京店 03-3646-2131 ●大阪店 06-6943-6151 ●福岡店 092-411-6565 ●札幌店 011-210-5311
●シンガポール店 6-3489981 ●営業所 仙台・名古屋 ●関連会社 銭屋不動産株式会社、台湾全麗雅設計股份有限公司、湯淺ホールディング株式会社

紙面のアートは現代のアーティストが「百扇帖」に挿した作品です。書・アート：赤岩保元